

06 江東区文化財保護強調月間

# 歴史と文化を 考えよう

10月4日(水)

文化財公開講演会

『時代の变革とひととの  
- 物的証拠から探る近代 - 』

10月8日(日)

時雨忌(芭蕉忌)講演会

『芭蕉句の新解二、三』

10月15日(日)

民俗芸能大会

『木場の角乗』『木場の木遣』『木場の木遣  
念仏』『砂村囃子』『獅子舞』『富岡八幡の  
手古舞』『深川の力持』



木場の角乗



海苔干し風景(昭和30年ごろ)

10月16日(月)~22日(日)

旧大石家住宅特別公開

10月27日(金)~11月26日(日)

中川船番所資料館特別企画展

『江戸前に生きる~のり・かい・さかな~』  
講演会 11月10日(金)  
『江戸前に生きる  
- 東京湾漁業の過去・現在・未来』

11月1日(水)~5日(日)

江東ものづくりフェア

『第25回江東区伝統工芸展』『第1回伝統  
を継ぐもの展』『伝統工芸品チャリテイ  
ーバザール』

11月11日(土)~26日(日)

深川江戸資料館 秋の特別展

『深川佐賀町の歴史と生活』  
講演会 11月17日(金)

『江戸幕府と隅田川~米蔵を中心に~』

11月18日(土)

歴史さんば

『江戸から平成を渡る

- 中川番所と荻新田の文化財 - 』 『江戸表具』岩崎清二氏の指先



# 下町文化

NO.

235

2006.9.27

発行

江東区教育委員会  
生涯学習部生涯学習課

〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

江東区文化財保護強調月間

民俗芸能大会

文化財公開講演会

時雨忌(芭蕉忌)講演会

旧大石家住宅特別公開

歴史さんば

江東ものづくりフェア

中川船番所資料館特別企画展

『江戸前に生きる

~のり・かい・さかな~』

深川江戸資料館秋の特別展

『深川佐賀町の歴史と生活』

江東歴史紀行

深川の河童目撃談

ココにも歴史があった

囲炉裏ばた(大石家日記)

今年も文化の秋とともに『江東区文化財保護強調月間』がやってまいりました。江東区の歴史と文化に興味のある方、「ものづくり」を体験したい方、イキでないせな世界を堪能したい方、もっと深く江東区を知りたいと思っ  
ている方、下町文化をチェックして、さっそく会場へGO!

10/15(日) 江東区民まつり

# 民俗芸能大会

江東区に伝わる民俗芸能の数々を公開します。いずれも東京都・江東区の無形民俗文化財として登録・指定されています。

江戸時代からの木材の集散地・木場を抱える江東区ならではの民俗芸能が木場の角乗と木遣です。角乗は水面に浮かぶ角材という不安定な場所です。数々の妙技を披露します。木遣の起源は木材を操るときに労働歌で、仕事のテンポの違いからさまざまな節が生まれました。また、木遣念仏は木遣の節が入っていることが特徴です。

一方、砂村囃子はかつて農村地域だった砂村に伝わったお囃子で、江戸近辺の祭囃子のひとつです。

鮮やかな衣装がひときわ目を引く



**会場** 都立木場公園(木場4丁目)入口広場・ふれあい広場  
**交通** 地下鉄東西線「木場駅」下車徒歩5分  
地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分  
都バス[業10][業平橋駅前~新橋]木場4丁目・東京都現代美術館前下車

は富岡八幡の手古舞で、3年に一度の本祭りで神輿の先導を勤めます。

手に汗にぎる

力技といえば、深

川の力持です。米俵を片手で持ち上げるのはまだ序の口、だんだんと難しい技に挑戦していきます。



【午前11時~12時30分】

木場の角乗《木場角乗保存会》

【午後1時~3時30分】

木場の木遣《木場木遣保存会》

木場の木遣念仏《木場木遣保存会》

砂村囃子《砂村囃子睦会》

富岡八幡の手古舞

《富岡八幡の手古舞保存会》

深川の力持《深川力持睦会》

10/4(水) 受講無料

# 文化財公開講演会

みなさんは、区内に近代の史跡が多くあることを知っていますか？わずかに残されたこれらの「遺産」たちは、近代化という荒波の中で何が変わっていったのかを静かに語ります。現代まで残る「遺産」から、近代という変革の時代を見つめ直してみませんか。

演題 『時代の変革とひとともの物的証拠から探る近代』

高山優(港区教育委員会学芸員)

日時 10月4日(水)午後6時30分~8時30分

場所 江東区教育センター大研修室(東陽2-3-6)

定員 80名(先着順)

申込 電話で文化財係へ

(3647)9819

強調月間協賛事業 受講無料

## 時雨忌(芭蕉忌)講演会

芭蕉記念館では、10月12日の芭蕉の命日にちなみ、講演会を開催します。

日時 10月8日(日)午後2時~3時30分

演題 「芭蕉句の新解二、三」

講師 矢島渚男(俳誌『梟』主宰)

定員 80名(先着順)

申込 記念館窓口または電話にて

(3631)1448

10/16(月)~22(日)

# 旧大石家住宅特別公開

江東区に唯一残る木造茅葺民家で、区の指定文化財でもある旧大石家住宅を平日も公開いたします。ペーゴマヤ剣玉の遊び道具のほか、再築10周年を記念して、解体・再築の写真パネルを展示します。

時間 午前10時~午後3時30分

交通

地下鉄東西線南砂駅下車徒歩15分

都バス[電21](亀戸駅前~東陽町駅前)

門21(東大島駅前)門前仲町[両28](葛西橋)西国駅前[電29](なぎさニュータウン)

亀戸駅前[秋26](葛西駅前)秋葉原駅前[亀高橋]・東砂4丁目下車徒歩5分

11/18(土) 歴史さんぽ

「江戸から平成を渡る」

—中川番所と荻新田の文化財—

中川船番所資料館の周辺は多くの史跡や文化財に恵まれています。今回は特別展を見学したあと、江戸時代「荻新田」と呼ばれた東砂1・2丁目界隈を歩きます。秋の中川沿いも歩く、ちよとせいたくな歴史さんぽです。

日時 11月18日(土)午後1時~

講師 江東区文化財ガイド員ほか

詳細は10月11日の区報をご覧ください。

11/1(水)～11/5(日)

# 江東ものづくりフェア

入場無料

伝統技術によるものづくりに関して、さまざまなイベントを行います。江東区に伝わる伝統文化に触れるまたとない機会です。たくさんの方々のご来場をお待ちしています。

会場 森下文化センター(森下3 12 17)  
時間 午前9時～午後5時(最終日は午後4時まで)

## 第25回 江東区伝統工芸展

区の登録無形文化財(工芸技術)保持者の方々の作品を一堂に展示します。期間中、職人さんの技を実際に見学できる実演公開が行われます。また、職人さんの指導を受けながら、ものづくりの体験もできます。実演・体験の日程は下記の表をご参照ください。

【体験申込み】10月11日(水)午前9時から電話で文化財係まで(先着順)。なお、教材費がかかりますのでご注意ください。

電話03(3647)9819



学校見学のようす(昨年度)

## 第1回 伝統を継ぐもの展

無形文化財保持者の指導を受けた職人さんたちによる作品を展示します。受け継がれていく確かな技をご覧ください。

伝統工芸品チャリティバザール  
期間中、江東区伝統工芸保存会主催による伝統工芸品の販売が行われます。



更紗染・無地染(昨年度)



江戸指物(昨年度)

## 伝統工芸技術の実演・体験日程

### 実演日程

日時	9:30～11:30	13:30～15:30
11月1日(水)	刀剣研磨 白木良彦	江戸表具 岩崎清二
11月2日(木)	江戸木彫刻 岸本忠雄	仕舞袴製作 杉浦武雄 実演は帯製作となります

### 実演・体験日程

日時	10:00～12:00	13:30～15:30
11月3日(金・祝)	江戸切子 小林英夫 定員12名 費用1000円	江戸切子 小林英夫 定員12名 費用1000円
	江戸指物 山田一彦 定員15名 費用1500円	江戸更紗染 佐野利夫・勇二 定員5名 費用2000円
	象牙細工 前田賢次	手描友禅 和田宣明
11月4日(土)	江戸表具 岩崎清二 定員8名 費用600円	縫紋 天野一政
	相撲呼び出し裁着袴 富永皓	庖丁製作 吉實庖丁店
	江戸木彫刻 渡辺美寿雄	建具組子 木全章二 定員15名 費用2000円
	無地染 近藤良治 定員10名 費用2000円	
11月5日(日)	江戸簾 豊田勇 定員4名 費用500円	江戸木彫刻 岸本忠雄 定員15名 費用1000円・2000円
	江戸襖櫓・椽 鈴木延坦	
	江戸切子 須田富雄	紋章上絵 石合信也
	江戸指物 山田一彦 定員15名 費用1500円	刀剣研磨 白木良彦

■は体験(職人教室)です。

10月11日(水)午前9時から電話で文化財係までお申し込みください(先着順)。なお、教材費がかかりますのでご注意ください。



### 交通

地下鉄新宿線・大江戸線「森下駅」下車A6出口より徒歩8分

地下鉄半蔵門線・大江戸線「清澄白河駅」下車徒歩8分

都バス[門33][亀戸駅前～豊海水産埠頭]「高橋」下車徒歩5分・[業10][業平橋駅前～新橋]「森下5丁目」下車徒歩5分

10/27(金)～11/26(日)

中川船番所資料館特別企画展

# 「江戸前で生きる」のり・から・とかなー」

高層ビルが林立する東京の埋立地。そこは、かつて生産の場として、江戸・東京の食生活を支えてきました。数kmにもおよぶ遠浅の海。ゆるやかに沖合へと広がる、洲とよばれた広大な砂地では、魚貝類採取や海苔養殖などが行なわれました。多くの恵みを与えてくれた海を、江戸・東京の人々は、親しみを込めて「江戸前」と呼びました。その言葉には、「自分たちの海」という意味合いが込められていたのかもしれない。

その漁業権が消滅して40年以上を経たいま、「江戸前に生きる」と銘打って、江東区の前海でどのような漁業が行われていたのか、当時の史料や実際に使われていた道具を通して、あらためて見つめ直します。

## 【展示コーナー】

- 1階 導入展示 写真や大型民具を展示します。
- 2階 (1) 江戸の海と食文化
- (2) 海苔養殖のはじまり
- (3) 漁師のしごとくらし

## 江東区の漁業

江東区と漁業の関わりは、寛永6年(1629)に成立した深川獵師町(清澄)永代までの隅田川沿い)にはじまります。現在の深川浜(永代・古石場とその周辺)は、その流れを汲む歴史をもち、公的には深川浦と呼ばれました。獵師町は、八ヶ町(清住・佐賀・



コシタポ(貝類を採る道具)

熊井・相川・諸・富吉・大島・黒江)の総称ですが、漁師たちは、幕府(江戸城)への御菜御肴(魚貝類)の献上、

あるいは船を使った労働力の提供などを背景に、佃島(中央区)、芝金杉・本芝(港区)、品川獵師町(品川区)などとともに、江戸前の海を自由に動きまわり、漁業を行なうことが幕府から許されていました。この特権は、江戸時代を通して変わりませんでした。ただし、深川の町としての発展、埋め立てなど、時とともに漁師の居住地(浜地域)も変わり、永代、門前仲町、古石場などへ次第に南下しました。

明治になると、深川浦と砂村(現在の南砂とその周辺)は、ともに19年から海苔養殖をはじめます。広大な遠浅の海をもつ「江戸前」の自然環境は、貝類生産のみならず、海苔養殖にも最適だったのです。展示では、それらの生産で使用された道具にも焦点をあてます。

## 生産・生活を語る道具

「江戸前」で漁業に従事した漁民の生活や養殖の様子を最も雄弁に語るものは、当時使われた道具でしょう。魚

貝類の捕魚採取をはじめ、海苔の養殖に関わる道具は、ほとんどが動力化される以前のものです。長い時間をかけ、少しずつ改良が加えられてきた道具には、数十年、数百年にわたって、世代を超えた、多くの人々の生きる知恵が蓄積されています。その道具に加え、漁法や魚貝などについても、写真やパネルを使って解説し、「江戸前」の海の豊かさを多角的に伝えます。

現在は、失われてしまった「江戸前」の海。高層ビルが林立するその場所を、この機会にもう一度見つめ直してみませんか。きっと新しい発見があると思います。

## 講演会の開催

講演会「江戸前に生きる 東京湾

漁業の過去・現在・未来」

講師 尾上一明(浦安市教育委員会生涯

涯学習課主任研究員)

日時 11月10日(金)午後6時30分

詳細は10月21日の区報をご覧ください。

## 中川船番所資料館(江東区大島9 1 15)

観覧時間 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで、月曜休館)

観覧料 大人200円(団体150円)小中学生50円(団体30円)

団体は20名以上

交通 地下鉄新宿線「東大島駅」下車徒歩5分

問合せ ☎03(3636)9091

## 深川江戸資料館開館20周年 秋の特別展

# 「深川佐賀町の歴史と生活」

深川江戸資料館では、これまでに「江戸深川の飲食店」「信仰・行楽の地」「深川木場の歴史と文化」など江戸時代深川の地域的特色をとりあげた特別展を開催してきました。20周年にあたる今年も、満を持して、資料館の基点である佐賀町に迫ることになりました。隅田川の東、いわゆる「川向こう」にあたる地域ですが、永代橋により江戸の中心地と結ばれ、流通・産業・文化に大きく関わってきました。江戸市の中に一番近い町・深川佐賀町から、江戸・東京を見据えます。

開館から20年を経た資料館展示室に再現されている町並み・深川佐賀町。資料館では天保年間末期、約170年前の深川佐賀町を実物大で想定復元してきました。

寛永6年（1629）深川獺師町の一角として成立した佐賀町は、その後



『葉子話船橋』

これは明治以後も変わることなく、佐賀町周辺を特徴付ける地域的特色となりました。現在の佐賀町も会社や倉庫が多く、江戸時代に形成された役割がそのまま「町の色」になっています。こうした佐賀町の成立から発展について、江戸時代を中心に絵画資料や地図、文献資料などを集めて紹介・解説し、その特色を知っていただく機会といたします。近年資料館が所蔵することになった深川周辺の絵図（手書き）もはじめて展示いたします。



「深川総画図」

深川、江東地域の歴史・文化を知っていただく絶好の機会となりますので、お誘い合わせの上ご来場ください。

## 講演会の開催

特別展に合わせて講演会を開催します。江戸幕府財政が成立する過程に隅田川が果たした役割について、幕府財政史研究の第一人者が講演します。

演題 「江戸幕府と隅田川」

～米蔵を中心に～

講師 大野瑞男 東洋大学名誉教授

（日本近世史）

日時 11月17日（金）

午後2時～4時 開場1時半

会場 深川江戸資料館2階小劇場

参加費 千円 講演会のチケットで、あわせて展示室をご覧ください。

申込 10月8日10時より資料館・各文化センター等財団法人江東区

地域振興会各施設（芭蕉記念館・中川船番所資料館を除く）にて電話または窓口で。

観覧料 大人300円 小中学生50円

（総合展示室観覧料に含まれます）

中学生以下の方は保護者の方と一緒に見学しましょう。

（入館は16時30分）

江東区深川江戸資料館（江東区白河1 3 28）

交通 地下鉄大江戸線 半蔵門線 清澄白河駅「下車」最寄A3出口「徒歩3分」

地下鉄新宿線 森下駅「下車徒歩15分」

地下鉄東西線 門前仲町駅「下車徒歩15分」

都バス 門33「亀戸駅前」豊海水産埠頭「清澄庭園前」下車徒歩3分

秋26「葛西駅前」秋葉原駅前「清澄白河駅前」下車徒歩4分

問合せ ☎03(36630)8625

# 深川の河童目撃談

水辺の妖怪と言えば河童です。無数の掘割に囲まれた深川では、ちよっと前までも、河童が生きていると信じられていました。

梅田桑弧『河童の唄 大正・東京風物詩』によれば、子どもだった大正時代の思い出話として、「ミスバ(水場)の橋(海辺橋。仙台堀に架かる橋)には河童が出る」と大人たちよりおどされたといひます。河童は月の見える夜には筏の上に乗って唄を歌うとされてきました。

江戸時代には、実際に河童を目撃したという人がいます。各種の文献から紹介してみましよう。

## 太田大洲の「水虎図」

江戸時代、河童は「河伯」とも「川太郎」とも呼ばれていますが、本草字(薬用)に重点を置いた生物学)においては「水虎」と命名されていました。18世紀初め、

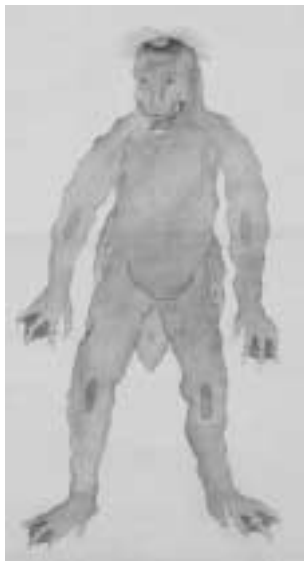


図1『魚類図巻』  
(国立公文書館蔵)

心に放射状に頭髪が伸び、目は丸く、牙が出ている口は大きく裂けています。手足の爪は鋭く、指の間に水かきが付き、胴体は甲羅のようなものに覆われています。これは、口の部分を除けば大体現在

の河童のイメージと一緒でしょう。

明和の頃(1764~72)本所御竹倉(墨田区両国3~4。隅田川に架かる両国橋の東詰北)付近において河童が捕われた時、鑑定を依頼された太田大洲が実物と本図とを見比べ、寸分違わなかったといひます(『水虎十二品之図』ほか)。では、この水虎図は、いつ描かれ、どこに出現した河童だったのでしょうか。『水虎考略』では記すところがないので、少し探ってみましよう。

江戸後期の有名な見聞随筆集『甲子夜話』の巻32(1823年記)では、享保年中(1716~36)「本所須奈村」の芦の中(1716~36)「本所須奈村」の芦の中の沼田の間に、子育て中の河童を村人が発見し、親河童を追い出して子を捕まえたときの図で、大洲の父・岩永玄浩が鑑定したものとが、「本所御材木倉」の取り立てのときに芦藪を刈り出して捕獲したものだという説を記しています。これは、『甲子夜話』の筆者・平戸藩主松浦静山による時代が下った時点での聞き書きである以上、全面的には信用できませんが、砂村は農村部であり、本所や深川から延びる掘割や川もありましたので、河童が子育てをする環境としては不思議ではありません。また、「本所御材木蔵」は深川猿江の材木蔵(住吉2・毛利2)のことと思われ、本所からの移転は、享保19年(1734)のことです。



図2『水虎考略後編』  
(国立公文書館蔵)

ここは砂村との境になる横十間川に隣接した地域になります。

ところで、『水虎考略後編』(1839年成立)には、「水虎図」3として図2を紹介し、『水虎譜』はこれを「深川木場ニテ昔年捕所ノ図」と説明しています。この河童は全身、茶色に彩色されていますが、容貌は太田大洲の水虎図と同様のものです。「昔年」がいつのときのことかはわかりませんが、或いは『甲子夜話』に言う享保期の砂村、もしくは材木蔵で捕獲された河童と同一のものかもしれません。そうだとすると、深川で捕獲された河童が水虎図の標準形となった可能性は高いとも言えます。

## 仙台藩邸で塩漬けにされた河童

天明元年(1781)深川佐賀町(清澄1)の仙台藩蔵屋敷(仙台堀北岸)において、河童が撃ち殺され、塩漬けにされる事件が起こりました。屋敷内に大溝堀があり、その周りでは子どもが溺れるという原因不明の事故が多発したので、堰の水を干したところ、図3のような河童

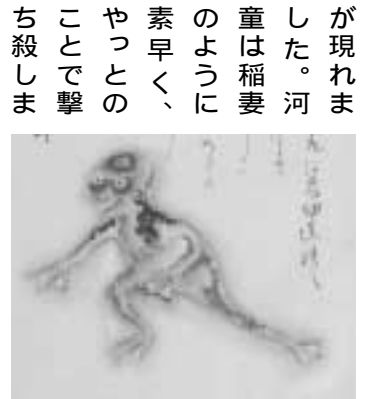


図3『水虎考略後編』  
(国立公文書館蔵)

が現れま  
した。河  
童は稲妻  
のように  
素早く、  
やっとの  
ことで撃  
ち殺しま  
した。その大きさは犬ほどもあったとい  
います(『水虎考略後編』所引「妖怪」)。  
図3は茶色に彩色され、或いは猿を連想  
もさせますが、動き回る河童をイメージ  
しているのでしょう。

さて、勘定奉行・松本秀持が、仙台藩  
邸で殺された河童の図を勘定組頭・根  
岸鎮衛のもとに持ってきました。これを  
書き写したのが、根岸の随筆集『耳囊』  
巻1に載る図4です。根岸のスケッチに  
よれば、眼は切れ上がり、口は鳥のくち  
ばしようです。全身は灰色だったと記  
されています。

仙台堀は隅田川から深川に入る堀で、  
この河童は伊達家と共に仙台から江  
戸に出てきたものといひ、仙台藩の力を



図4『耳囊』  
(続随筆文学選集)

背景に、隅田川を自分たちのものと、北  
は鐘ヶ淵(墨田区)から南は河口まで我  
が物顔で泳ぎ回り、悪戯を繰り返すよう  
になったといひます。これを昔から住ん  
でいる本所・源兵衛堀(源森川。墨田区  
吾妻橋)の河童たちが反発し、さらに横  
十間川・天神川・大横川の河童たちも  
加わって、抗争が起こりそうになったた  
め、これを心配した幕府御船手組頭の  
向井将監が、錦糸堀の河童の長老に仲  
裁を頼み、一件落着いたという民話があ  
ります(宮原秋男『本所どぶ板談義』)。  
**河童の説び証文**  
ほかにも深川にはたくさん河童話  
が伝わっています。

安永年中(1772~81)深川入船  
町(木場1)において、ある男が水浴びを  
していたところ、河童がその男に襲いか  
かりました。ところが、男が剛力の持ち  
主だったため、逆に河童が捕えられ、陸  
に引き上げられたといひます。男は三十  
三間堂前(富岡2)で打ち殺そうしまし  
たが、周囲の人々が許してやることを勧  
めたので、今後近辺では人間を捕獲しな  
いと証文を取り解放しました。その証  
文は河童の「手判」を墨で押したものだ  
ったといひます(津村涼庵『譚海巻2』)。  
この河童は、隅田川からの入堀・油堀  
(佐賀(木場)に生息していた河童でし  
ょうか。世に天狗の説び証文なるものも

伝わっていますが、河童のものもあつた  
というのは面白い記事です。  
このような深川における河童目撃情  
報の多さからか、安永元年(1772)に  
出版された『怪談御伽童』巻2には、本  
庄扇橋川童の事」といふ話が載っていま  
す。内容は次のようなものでした。  
扇橋に船大工五郎徳という者がいた。  
五郎徳は棟梁だったので弟子が多く、家  
も広かった。梅雨も上がり、川の水もき  
れいになったので、たまつた洗濯物を洗  
うため、下女が、前なる川(小名木川力)  
で洗濯していたところ、眠気に襲われて  
傍らの石に座って眠ってしまった。そう  
したところ、足を引っ張る者がいるので  
驚いて見ると、8歳くらいの子どもだつ  
た。子どもは髪を振り乱していたのでよ  
く見えなかったが、手は細いのに力が強  
く、水の中から女を引っ張っていた。女  
は川に落ちそうだったので、やっとのこ  
とで子どもの手を離して逃げ出したが、  
子どもは水から上がり追いかけてきた。  
必死の思いで、主人の家に逃げ帰り、座  
敷に上がった途端、気を失った。昼飯中  
だった家の者たちはこれに驚き大騒ぎ  
になった。庭が今までは乾いていたのに、  
水を流したようになり、所々に水溜りが  
できていた。正気に返った女から、川で  
の出来事を聞いた人々は、それは河童の  
仕業に違いない。河童が庭で転び、頭の  
皿の水をこぼしたのだろつと言ひ合つ  
た。主人の五郎徳は、後日の災いを恐れ  
て、その日のうちに女に暇を取らせ、宿  
に送つた。  
この本を手にとつた読者は、江戸深川  
の水辺の情景を頭に描きながら、この怪  
談を楽しんだに違いありません。  
\* \* \* \* \*  
川・掘割は今よりそばにあり、人々の  
生活に密着していました。時に水の事故  
も起きたでしょうし、人々が堀川に対し  
て抱いた畏れのようなものが河童とい  
う妖怪を生み出したのかも知れません。  
深川にとつて河童はたいへん馴染みの  
深い妖怪でした。  
最後に、『絵入自由新聞』明治18年(1  
885)8月27日号は、札幌で捕獲され  
た河童が、船便で深川佐賀町の河岸まで  
運ばれたことを伝えています。河童は  
猩猩(想像上の獣で猿の一種)のよう  
で、3尺(約1m)もあり、4歳だったと  
いひます。佐賀町の蕎麦屋が見世物にす  
るため買い取つたものであると報道さ  
れています。蕎麦屋は本場深川の河童  
として売り出そうとしたのでしょうか。  
今度、仙台堀川のそばまで行つたら、川  
面をゆっくりと見下ろしてください。河  
童が元気に泳いでいるかもしれませぬ。  
(文化財専門員 今野慶信)

# コトにも歴史があった



上の写真をみて、皆さんはすぐに「桶」とおわかりになるとおもいます。でも実際にご家庭で現在も桶を使っていらっしゃる方は少ないのではないのでしょうか。

## 昔の写真を探しています

姿を消したのは、道具だけではなく、それを使用する暮らしでもあるのです。道具が消えるとそれを使用していた光景も記憶から薄れていくものです。かつては日常生活のなかで当たり前のように目にしていたものが、思い出そうとするとぼんやりとしか思い出せないということはありませんか？

文化財係では、以前から区内で使用されてきた生活道具や生業道具を寄贈していただき民俗資料として保管しています。こうした道具を実際に使用している写真や、置かれている状況を

桶の語源は麻糸を入れるための曲物でできた「苧筒」からきたといわれています。鎌倉時代の末に、短冊形に削った板を円形に並べて竹のタガで締め、底板をつけた現在のような桶が作られるようになったそうです。

写真の桶は、米などを洗う時に使用したもので、かつては各家庭の流しに置かれ、活躍してきた道具です。しかし、ステンレスやプラスチックの製品が時代の主流になっていくのに従い、姿を消してしまいました。

## 写した写真を探しています

募集する写真は、かつての漁業や農業といった生業に関する写真はもちろんのこと、戦前のものから、高度経済成長期の昭和30年代ごろまで、炊事や洗濯をしているところ、食卓をかこむ一枚、はやりのキャラクターおもちゃとの記念写真、新しい家電製品を使っているところなど、暮らしの様子がわかるもの、当時の流行を物語る写真をお貸しください。お借りした写真は文化財係で複写したのちお返しします。

## 問合せ 江東区教育委員会文化財係

☎(3647)9819

## 開炉裏ばた(大石家日記) 七夕お話し会



旧大石家住宅では、移築以来毎年七夕の時期に、笹を用意して来館者の皆さんに願い事を書いた短冊を吊るしてもらう七夕飾りを行っています。

今年は、いつもの七夕飾りのほかに、7月4日・7日の両日、区内の幼稚園・保育園の園児を対象とした「七夕お話し会」を開催しました。当初は7月4日だけの予定でしたが、申込みが多かったため、もう一日増やし7日にも開催しました。2日間で幼稚園2園・保育園4園から計230余名の園児たちが訪れました。

この日は、園児たちが前もって願い事を書いた短冊を持参し、用意した笹に結んでもらうことから始まりました。小さな手でこよりを持ち、「自分でできるよ」とみんな一生懸命に結んでいま

した。短冊の飾り付けが終わると、住宅内で「おはなしパレット」のみなさんによるお話しや手遊びを楽しみました。七夕にちなみ、織姫・彦星のお話のパネルシアターもあり、最後にみんな「笹の葉さらさら」を歌いました。

はじめて聞くお話はもちろんのこと、よく知っている昔話でも、いつもとは雰囲気の違いが古民家の中ということもあり、お話しに引き込まれて、真剣な表情で聞いていました。

まだまだ、文化財の意味もよく知らない園児たちですが、古い家で昔話をきいた記憶は、将来、モノを大切にする気持ちにつながってくれることと思えます。

文化財係では、次世代のための文化財保護活動を推進するため、子どもたちが文化財とふれあえる機会をもてるようなイベントをこれからも企画していく予定です。

